

人間関係体験学習におけるコラージュの導入

－コラージュ作品に見る女子短大生の自己表現－

吉 田 ゆ り

Effect of college activities in human relation program
－ self-discovery of girl college students in college work －

Yuri Yoshida

現代若者の気質はさまざまに取りざたされているが、その人間関係の質的量的変化の存在は明確であり、人間関係に悩む学生も多い。これらの社会的変化を背景に、高等教育においても人間関係体験学習を取り入れる試みがなされてきた。本学内の体験学習プログラムにおいてもさまざまな実習などをおこなっているが、その一部としてコラージュを導入した。そのコラージュ作品を分析したところ、内容は個人の興味・関心によって差があるが、その作り方や形式には集団の影響が明確にでるものがあつた。本研究は、コラージュの人間関係体験学習への導入の可能性と今後の課題をさぐり、女子短大生の自己表現の一端を探る。

Key words: [自己表現] [self-discovery] [コラージュ] [人間関係体験学習]

(Received November 6, 2000)

I 自己表現技法としてのコラージュ

1 高等教育における体験学習のとりいれ

現代の若者についてはさまざまな観点から実にさまざまな問題が提起されている。特にその人間関係は、いじめの頻発や少年犯罪のように社会問題化したものから、人間関係そのものの希薄さ、自己表現の不得手さ、あいまいさ、奇異にみえるファッションでの自己主張など話題がたえることはない。この背景には携帯電話やパソコンの普及といった情報機器の発展だけではなく、社会そのものの変化についてあらゆる観点からの分析が可能であろう。

この時代の中、学校教育において、体験学習をとりいれようという流れがある。体験学習とは「学習者の体験をベースにした学習」(星野, 1992)¹であると言われる。さらにいえば「私たちが日常生活の体験から、あまり意識せずに学んでいる学び方を教育方法として構造化したもの」(星野, 前出), つまり従来の学校教育が机上の学習に加えて理科系の実験実習や体育・芸術系の実技を中心に展開されてきた中に、一見あそびの延長のような実際に体験

する方法を意識的に取り入れていこうということである。

しかし、従来の学校教育の中でも小中学校では学級会活動やクラブ活動として、高等教育では教育実習や福祉施設実習として取り入れられてきた。特に高等教育機関における実習は教員免許取得などの目的にそって行われ、一定の効果を収めてきたと言えよう。

本研究は、特に人間関係に焦点を絞った体験学習について述べていきたい。

現在の体験学習の流れは、大きく分けて2つの方向があると思われる。これを以下に示す。

① ラボラトリー方式をメインとする体験学習

南山短期大学人間関係センターが取り組む体験学習は、ラボラトリー方式によって人間関係の体験学習を実施している。その中には個人のきづきのためのトレーニングから組織・小集団内の人間関係、リーダーシップなどにいたるまでさまざまなプログラムが組まれている。

② 構成的エンカウンター

國分康孝らは構成的エンカウンターを基礎とした体験学習を提唱している。対人関係ゲームプログラム (SIG)²や構成的グループエンカウンターとして小・中学校からさまざまな実践がある。³

本学も、生活学科人間文化コースにおいて、①の南山短期大学のプログラムの流れを受け、人間関係の体験学習を取り入れたプログラムを実施している。このプログラムは、自己認知・他者認知→自己認知の深化→コミュニケーション→小集団内人間関係→組織の中の人間関係(含リーダーシップ)とすすむ。いわゆるhow toのスキルを身に付けるカリキュラムではなく、日常生活の人間関係場面に有効なスキルを組織的に訓練すること、また、あたらしいスキルを開発する取り組みである。

2 コラージュに関して

① 個人への適応

個人にたいする心理療法のひとつとしてコラージュを導入する方法は、森谷 (1993)⁴・杉浦 (1994)⁵に代表される。現在では日本芸術療法学会などでさまざまな事例が報告されており、個人療法として国内では定着した観がある。実際の手法としては、森谷らのボックス・コラージュ法と、杉浦らのマガジンプクチャー法がある。ボックスコラージュ法は、あらかじめ箱の中に切片を用意しておき、クライアントにそこから選んでコラージュを作ってもらうやり方である。マガジンプクチャー法は、雑誌など素材を用意するかあるいはクライアントに持参してもらい、切り抜くところから始めるやり方である。

いずれのやり方においても、その治療的要因の検討がなされ、自己表出や内面の意識化、自己表現方法として評価されている。また、箱庭療法などに比べると集約的で手軽であること、実施の物理的条件 (用意する道具の身近さや場所の制約など)、大人にも適用できることなどの特徴がある。

② 集団への利用

個人へのアプローチと別に、集団への利用についても歴史がある。自己啓発技法・集団絵画療法・リハビリテーションとしての流れである。

Remocker & Storchi⁶の著書「身ぶりで語ろう」のなかで非言語的な人間関係スキルのためのゲームを提唱しているが、そのなかでコラージュを紹介している。方法については、グループのレベルとして「凝集性が低く、高度に孤立したメンバーの多いときに特に効果的である」とし、グループで題を選ぶ方法が採られている。しかし留意点として、この体験学習の手法集は、きっかけに過ぎず、変法があってもよいとしている。

精神科の患者の小グループ治療を紹介した事例もある。そこでは「精神病であったりあるいは非常に重篤な障害があるため、言語性の高い集団療法への適応が困難で、言語性レベルの低い集団精神療法を開発する必要がある、それには実際的で具体的な問題への対応を含んだ内容を備えた構成的な活動が有効な手段となる」とされ、この目的は基本的には慢性患者を対象とするとしながらも、「自己認識を高め、対人関係の向上を目指している人々に対しても年齢、精神機能、目的に合わせて応用することによって効果を上げることが可能」としている。ここでコラージュは、「共同作業による非言語的、言語的コミュニケーションを通して集団凝集性を高めていく種目」であるといえる。

さらに、津村ら⁷も体験学習のプログラム集の中で「私の箱：セルフ・ボックス」として、箱にコラージュを応用した方法を紹介している。

コラージュ技法は、絵画療法のひとつとして取り入れられている

杉浦（1994）⁸は、コラージュ技法の歴史について、「外国でははじめ作業療法の分野で用いられ、しだいに芸術療法に取り入れられるようになったが、主に評価法、自己啓発法として用いられていた」としている。日本においては個人療法としてすでに定着した観があるが、海外での出発点は集団にあることが伺える。日本における集団療法への適応事例はまだ少ない。

③ 人間関係科目への適応

青年期の自己表現に関してはさまざまなことが言われている。近年のジャーナリズムでも少年の事件がとりざたされ、若者の文化・風俗が紹介される。青年前期の若者の自己表現の不得手さ、人間関係が希薄だとも言われる。本当に希薄なのか、質の変化があるのか。

コラージュ療法は、そのコラージュ・アクティビティ「自分の内的な世界を台紙の中に整理していくこと」（杉浦、前出）により、不得手だといわれる若者の自己表現や自己認知につながる可能性をもつのではないか。また、集団で制作することによって、お互いに何らかの影響を与え合い、希薄だといわれる人間関係の中で、新たな自己を発見したり、他者を理解したりという手段につかえるのではないか。もちろん、集団制作であるので、個人療法で適応させる際にあるような病理性の発見や状態の理解にはつながらないが、制作者の性格や感性の発見にはつながるであろう。

人間関係体験学習へコラージュを取り入れ、そこで起こることを把握し、プログラムの可能性を広げることはできないであろうか。本研究はこの追跡である。

Ⅱ 研究の目的

コラージュ法を人間関係プログラムに採用する際、検討すべき課題として、以下の項目があげられる・

- ① マガジン・コラージュ法が自己認知・自己表現の手段となり得るか。
- ② マガジン・コラージュ法を集団で行うことにより、相互制作の過程でピア・カウンセリング的要素、あるいは人間関係調節の機能を持つか、その可能性をさぐる。
- ③ マガジンコラージュ法が集団凝集力を高めることができるか

このうち、本研究では①を採用し、女子短大生の作品基礎データを分析し、コラージュ作品の傾向をつかみ、自己表現に活かされているかを分析する。

この検討として、

A・実施集団の違いがコラージュ作品に影響するか

グループの構成（くじびきか自然発生的グループか）、短大に入学した当初か卒業間際かによっても異なるであろう。また、短大における用意されたカリキュラムにもよる。これらを統制し、その際のクラスあるいはグループの雰囲気によって左右されるのかどうかを実施集団の違いに絞る。

B・作品の形式（切片数や台詞の変形など）について

C・作品の内容（利用する切片の種類）

の視点で分析する。

Ⅲ 研究方法

1. 手続き

① 対象

本短大人間文化コースに所属し「人間関係基礎論Ⅰ」（コース必修）を受講した学生。よって性差・年齢の独立変数は設定しない。

ただし、研究の目的に明記したように、授業における実習のひとつとして取り入れるため、当日欠席した学生は対象に含まない。また、本研究にあたっては授業が終了した段階で研究の目的や分析方法をしめし、個人名・作品そのものは一切公開や掲載をせず、プライバシーの侵害に及ばないことを伝え、研究対象とする了解をとっている。

表1 対象者の属性など

実施年月日	所属人数	対象者	実施場所
1997年5月	36	36	学内2-208教室 (Nコース実習室)
1998年5月	43	42	
1999年5月	40	35	
2000年5月	27	28	

所属数より対象者が少ないのは欠席者である。また、所属数より対象者が多いのは、同一対象者で2枚作成したものである。この場合、制作時間・テーマ性などをみてどちらを主たる作品とするか曖昧であったため、今回の分析には2枚とも標本として採用した。

● 実施時期

研究の目的にあるように、コラージュの体験学習への適用が“自己表現の一形態”であることから、知り合ったばかりではなく、グループで自然に会話が生まれる程度の時期カリキュラムの中盤にはいる5月に実施した。

● 実施方法

杉浦（1994）（前述）のマガジン・ピクチャー・コラージュ法におおむね準拠した。

・材料の持参と学生への動機付け

前週の授業の際簡単にコラージュの説明をし「来週、コラージュをしますので、切りぬきに使いたいと思う雑誌、新聞、カタログを持ってきてください」と材料持参の形式をとった。これは学生へコラージュをすることの動機付けの意味を考慮した。しかし、持参を忘れた学生のため、あるいは持参したもので満足できない学生のためにあらかじめ材料を用意した。

● 実施時間

1時間半の時間制限を設ける。しかし、各自で終了と判断した時間に制作をやめてよい。しかし、教室外への退出は認められない。

● 教示

杉浦らは、口頭での教示を行っているが、本研究は授業を利用する人数が多い（26名～49名）こと、短大生はプリントでの指示になれていることから、プリントで行った。プリントは各自1部配布、B5版1枚。

「これからコラージュを今日同じテーブルになったクラスメイトに、自分を表すポスターを作ってもらいます。持参した雑誌類やこちらで用意したものをつかって、好きなものを切り抜き好きなように貼っていきましょう」

● 空間配置

テーブルは人間関係実習に使用される形で、正六角形。ここにくじ引きで座る。1つのテーブルに6人まで座れることができるが、クラス全体の人数により差があるときは、1テーブル4人にならないように、5人もしくは6人とする。

● ファシリテーターの位置づけ

ファシリテーター（この場合教員）は、各グループのテーブル間をまわるが、質問のあった場合に対応する。しかし、評価的な発言や作品の解釈などは控えることとする。

また、集団絵画療法の考え方では、セラピストも自分の作品を作り、メンバーが説明するとき自分のコラージュについて説明することが重要としているが、今回は教員であり、その作品がおのずから「お手本」になってしまいがちなこと、複数のテーブルがあるためどのテーブルに座るかによっても作品に制約がかかることが懸念されることから、ファシリテーターは作品を作らないこととする。

● 意見交換・ふりかえり

作品をグループ全員が作り終えたならば、作品を眺めながら簡単に意見交換をし、その後ふりかえりを記入する。今回はふりかえりの分析はいれず、次回の課題とする。

2. 分析方法

【形式分析】

1). 分析項目の決定

先行研究 [岡田 (1984)⁹・杉浦 (前述)] のレコードシートを参考に分析項目を設定した。今回の分析に先立って、予備調査を4回行ったうえで項目を設定した。

先行研究で分析されている色調 (明度・彩度・色相)・主な色彩・統合性・中心性については分析者の主観による差が大きく、信頼性に欠けると判断されたため、今回の分析には使用しなかった。色彩数・余白の分量に関しても、正確な量の測定が困難であり、また、空白の位置に関しては複数の空白の位置の処理は不明確なため、今回の結果にはのせていない。台紙の大きさについては大四つ切り版 (縦38cm, 横54cm) に統一した。

2). 分析する項目

- ①台紙からはみ出しの有無：台紙から切りぬきがはみ出しているかどうか
- ②台紙の使用法：台紙自身を切る、曲げるなど変形させたり加工させたりしたか
- ③切片数：切りぬきの数
- ④重ね貼りの有無：切りぬきが重ね貼りされているか
- ⑤余白の有無：台紙の余白があるか
- ⑥余白の分量：台紙の余白の量 (シートを重ねて数値を出す)

【内容分析】

以下の項目が切片として使用されているかどうかを分析する。

- ①人物の使用 (および外国人使用・身体の一部の使用)
- ②動物の有無 (動物を素材としたキャラクターはのぞいた)
- ③植物の有無 (森林や山地など、風景として考えられるものをのぞいた)
- ④食べ物の有無 (食材・調理された状態のもの・菓子類・飲料などを含む)
- ⑤室内の有無 (室内写真をはじめ、家具類や間取り図を含む)
- ⑥風景の有無 (自然。建物などの人造物が一部含まれていても、風景として扱った)
- ⑦乗り物の有無
- ⑧化粧品の有無
- ⑨身に付ける物 (洋服・和服・アクセサリ・靴などの履き物・カバン類を含む)

3. 結果の処理方法

統計処理には、windows98, ローデータを表計算ソフトMicrosoft Excelに入力し、基礎データを作成した。各項目ごとの検定には統計ソフト S plus を使用した。切片数については t 検定および F 検定, その他の項目についてはカイ二乗による有意差検定をおこなった。

IV 結果

1. 形式分析

① 台紙からののはみ出しの有無

結果を表2に示す。

表2 はみだしの有無

	N	有	無	群内の有意差	全群間の有意差
A	36	6(16.75%)	30(83.3%)	*	なし
B	42	4(9.5%)	38(90.5%)	**	
C	35	4(11.4%)	31(88.6%)	**	
D	28	5(21.4%)	23(78.6%)	*	
	141	20(14.2%)	121(86.4%)	***	

* P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001

表の結果より、全群間の有意差は認められない ($\chi^2=2.357$, $df=3$, $P=0.502$)。よって、台紙からの切片のはみ出しは、実施集団の独自性とは関係がないと言える。

また、各群内のはみ出しの有無については、A群 ($\chi^2=6.402$, $df=1$, $P<0.05$) B群 ($\chi^2=14.579$, $df=1$, $P<0.01$) C群 ($\chi^2=10.489$, $df=1$, $P<0.01$) D群 ($\chi^2=3.811$, $df=1$, $P=0.051$) で有意差が認められた。よって、各群いずれも、台紙からの切片のはみ出しは少ないと言える。また、A B C D全体では有意差が認められた ($\chi^2=39.869625$, $df=1$, $P<0.001$)。よって、全群では、はみ出しは少ないと言える。

⑩ 台紙の使用法：台紙自身を切る、曲げるなど変形させたり加工させたりしたか

結果を表3に示す。

表3 台紙の変形・加工について

	N	有	無	群内の有意差	全群間の有意差
A	36	3(8.3%)	33(91.7%)	**	***
B	42	1(2.4%)	41(97.6%)	***	
C	35	0(0%)	35(100%)	***	
D	28	7(25.0%)	21(75.0%)		
	141	11(7.8%)	130(92.2%)	***	

* P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001

表の結果より、全群間の有意差が認められ ($\chi^2=59.059$, $df=3$, $P<0.001$)、よって、台紙の変形・加工については各群間の差があり、実施集団の特性の差があると言える。

また、各群内の変形・加工の有無については、A群 ($\chi^2=13.176$, $df=1$, $P<0.01$) B群 ($\chi^2=22.232$, $df=1$, $P<0.001$) C群 ($\chi^2=20.743$, $df=1$, $P<0.001$) で有意さ

が認められ、D群 ($\chi^2 = 2.743$, $df = 1$, $P = 0.098$) では有意差が認められなかった。よってA B Cの各群では台紙の変形・加工をした者は少ないが、D群では少ないとは言えない。

また、A B C D全群では有意差が認められた ($\chi^2 = 59.060$, $df = 1$, $P < 0.001$)。よって、全群では、台紙の変形・加工は少ないと言える。

④切片数：切りぬきの数

結果を表4に示す。

表4 結果一切片数

	N		mini	max	Range	S D	平均	中央値	分散分析の結果
A	36	1588	13	171	158	32.13	44.11	33.5	なし
B	41	1288	6	61	55	15.6	31.48	29	
C	35	1162	11	111	100	20.15	33.2	29	
D	28	1010	1	178	177	31.9	36.07	28.5	
全体	140	5048	1	178	177	25.56	36.06	30	

* $P < 0.05$ ** $P < 0.01$ *** $P < 0.001$

表の結果より、全群間の有意差は認められなかった ($F = 1.849$, $df = 3$)。よって、実施集団の違いによって、個人の切片数に差があるとは言えないといえる。

また、各群内のS Dが非常に大きく (A群 44.1 ± 32.1 , B群 31.5 ± 15.6 , C群 33.2 ± 20.6 D群 36.1 ± 31.9)、各群とも個人差が大きいことがいえる。

表5 結果一切片数 (先行研究との比較)

	N	mini	max	Range	S D	平均	中央値	
本 研 究 対 象	140	1	178	177	25.6	36.1	30	
杉浦 (高校生)	58	1	66	65	11	15.6		***
杉浦 (20歳代)	57	7	42	35	7.3	18.2		*

* $P < 0.05$ ** $P < 0.01$ *** $P < 0.001$

今回のデータと杉浦 (前述) の高校生のデータとを比べると、両群間に有意差が認められ ($t = 5.77$, $df = 196$, $p < .001$) 本研究の対象の方が切片数が多いと言える。

また、20歳代とは両群間に有意差が認められ ($t = 2.35$, $df = 1195$, $p < 0.05$)、本研究の対象の方が切片数が多いと言える。さらに表5をみると、最小切片数は大きな差がないが、最大切片数に大きな開きがあり、本研究対象者の範囲 (range) が大きいことがわかる。

⑤ 重ね貼りの有無：切りぬきが重ね貼りされているか

結果を表6に示す。

表6 切片の重ね貼りの有無

	N	有	無	群内の有意差	全群間の有意差
A	36	31 (83.3%)	6 (16.7%)	**	なし
B	42	35 (82.6%)	7 (16.7%)	**	
C	35	29 (82.9%)	6 (17.1%)	**	
D	28	22 (78.6%)	6 (21.4%)		
全体	141	117 (83.0%)	25 (17.7%)	**	

* P < 0.05 ** P < 0.01 *** P < 0.001

表の結果より、全群間の有意差が認められず ($\chi^2=0.362$, $df=3$, $P=0.948$)、よって、切片の重ね貼りについては各群間の差がなく、実施集団の特性があるとは言えない。

また、各群内の重ね貼りの有無については、A群 ($\chi^2=6.748$, $df=1$, $P<0.01$) B群 ($\chi^2=9.054$, $df=1$, $P<0.01$) C群 ($\chi^2=7.062$, $df=1$, $P<0.01$) で有意さが認められ、D群 ($\chi^2=3.811$, $df=1$, $P=0.05$, ただし $P<0.1$ では有意差有) では有意差が認められなかった。よってA B Cの各群では切片の重ねばりをした者は少ないが、D群では少ないとは言えない。また、全群では、有意差が認められた ($\chi^2=31.774$, $df=1$, $P<0.001$)。よって、全体では重ねばりをするものが多いことが言える。

⑥ 余白の有無：台紙の余白があるか

結果を表7に示す。

表7 台紙における余白の有無

	N	有	無	群内の有意差	全群間の有意差
A	36	27 (75%)	10 (27.8%)		**
B	42	23 (54.8%)	19 (45.2%)		
C	35	29 (82.9%)	6 (17.1%)	**	
D	28	13 (46.4%)	15 (53.6%)		
	141	92 (62.2%)	50 (35.5%)	*	

* P < 0.05 ** P < 0.01 *** P < 0.001

表の結果より、全群間の有意差が認められ ($\chi^2=12.083$, $df=3$, $P<0.01$)、よって、台紙の余白の有無については各群間の差があり、実施集団の特性が関係していると言える。また、各群内の重ね貼りの有無については、C群 ($\chi^2=7.062$, $df=1$, $P<0.01$) で有意さが認められ、A群 ($\chi^2=3.160$, $df=1$, $P=0.076$) B群 ($\chi^2=0.0478$, $df=1$, $P=0.8271$) D群 ($\chi^2=0.000$, $df=1$, $P=1.00$) では有意差が認められなかった。よって、C群では余白のある者が多いが、A B Dの各群では余白のあるものが多いとは言えない

A B C D全群では、有意差が認められ ($\chi^2=5.739$, $df=1$, $P<0.05$)、全体では余白のあるものが多いと言える。

⑦ 貼り紙の変形

結果を表8に示す。

表8 貼り紙の変形

	N	有	無	群内の有意差	全群間の有意差
A	36	3 (8.3%)	33 (91.7%)	**	**
B	42	1 (2.4%)	41 (97.6%)	***	
C	35	1 (2.8%)	34 (97.1%)	***	
D	28	6 (21.4%)	22 (78.6%)		
	141	11 (7.8%)	130 (92.2%)	**	

* P < 0.05 ** P < 0.01 *** P < 0.001

表の結果より、全群間の有意差が認められ ($\chi^2=10.148$, $df=3$, $P<0.05$)、よって、台紙の余白の有無については各群間の差があり、実施集団の特性が関係していると言える。

また、各群内の貼り紙の変形の有無については、A群 ($\chi^2=13.176$, $df=1$, $P<0.01$) B群 ($\chi^2=22.232$, $df=1$, $P<0.001$) C群 ($\chi^2=17.656$, $df=1$, $P<0.001$) 有意差が認められ、D群 ($\chi^2=3.811$, $df=1$, $P<0.0509$) では有意差が認められなかった。さらに、A B C D群の合計では有意差が認められた ($\chi^2=59.059$, $df=1$, $P<0.001$)。

よって、A B Cの各群では貼り紙を変形させる者の人数は少なく、D群では少ないとは言えない。また、A B C D群の合計では、明らかに変形をさせる者が少ないと言えよう。

2 内容分析

1) 切片の種類による使用の有無

① 人物像の使用

結果を表9に示す。

表9 人物像の使用

	N	有	無	群内の有意差	全群間の有意差
A	36	34 (94.4%)	2 (5.6%)	***	
B	42	40 (95.2%)	2 (7.8%)	***	
C	35	30 (85.7%)	5 (14.3%)	**	*
D	28	23 (82.1%)	5 (17.9%)	**	
	141	127 (90.1%)	14 (9.9%)	****	

* P < 0.05 ** P < 0.01 *** P < 0.001

表の結果より、全群間の有意差が認められ ($\chi^2=9.194379$, $df=3$, $P<0.05$)、よって、人物像使用の有無については各群間の差があり、実施集団の特性が関係していると言える。

また、各群内の有無については、A群 ($\chi^2=15.577$, $df=1$, $P<0.01$) B群 ($\chi^2=19.398$, $df=1$, $P<0.001$) C群 ($\chi^2=8.662$, $df=1$, $P<0.01$) D群 ($\chi^2=58.098$, $df=1$, $P<0.05$)

では有意差が認められた。さらに、A B C D群の合計でも有意差が認められた($\chi^2=52.049$, $df=1$, $P<0.001$)。

よって、A B Cの各群では貼り紙を変形させる者の人数は少なく、D群では少ないとは言えない。また、A B C D群の合計では、明らかに変形をさせる者が少ないと言えよう。

①-2 人物像の使用—外国人の使用

人物像のうち、外国人の使用について、表10に示す。

表10 人物像の使用—外国人

	使用総数	外国人	日本人のみ	各群内の有意差	各群間の有意差
A	34	28 (82.4%)	6 (17.6%)	*	
B	40	27 (67.5%)	13 (32.5%)		
C	30	19 (63.3%)	16 (53.3%)		
D	23	13 (56.5%)	10 (43.5%)		
	127	87 (68.5%)	45 (35.4%)	*	

* $P<0.05$ ** $P<0.01$ *** $P<0.001$

表の結果より、全群間の有意差が認められず($\chi^2=7.143$, $df=3$, $P=0.0675$)、よって、各群間の差がなく、実施集団の特性が関係していると言えない。

また、各群内の有無については、A群($\chi^2=6.570$, $df=1$, $P<0.05$)で有意差が認められ、B群($\chi^2=0.604$, $df=1$, $P=0.56$) C群($\chi^2=0.553$, $df=1$, $P=0.457$) D群($\chi^2=0.022$, $df=1$, $P=0.882$)では有意差が認められなかった。さらに、A B C D群の合計でも有意差が認められた($\chi^2=6.092$, $df=1$, $P<0.05$)。

よって、A群では人物像のうち外国人像を使用する物が多く、A B C D群では多いとも少ないとは言えない。また、A B C D群の合計では、外国人を使用する者が多いと言えよう。

表11 人物像の使用—身体の一部の使用

	使用総数	全身像あるいは頭部	身体の一部	各群内の有意差	各群間の有意差
A	34	21 (61.8%)	13 (38.2%)		
B	40	26 (65.0%)	14 (35.0%)		
C	30	18 (60.0%)	12 (40.0%)		
D	23	13 (56.5%)	10 (43.5%)		
	127	78 (61.4%)	78 (61.4%)		

* $P<0.05$ ** $P<0.01$ *** $P<0.001$

表の結果より、全群間の有意差が認められず($\chi^2=0.476$, $df=3$, $P=0.924$)、よって、人物像のうち全体像あるいは頭部を使用したものと身体の一部を使用した者については各群間の差があるとはいえず、実施集団の特性が関係していると言えない。

また、各群内の有無については、A群 ($\chi^2=1.453$, $df=1$, $P=0.228$) B群 ($\chi^2=1.288$, $df=1$, $P=0.258$) C群 ($\chi^2=0.269$, $df=1$, $P=0.604$) D群 ($\chi^2=0.218$, $df=1$, $P=0.05$) では有意差が認められた。さらに、A B C D群の合計でも有意差が認められた ($\chi^2=52.049$, $df=1$, $P<0.001$)。

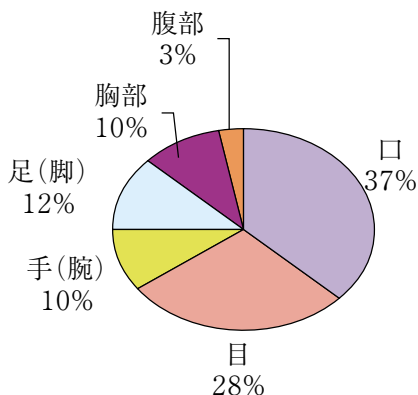


図1 身体部位切片の使用内訳

身体の部位を使用したものの使用切片の内訳は図1の通りである。目や口を使用する者が多いが、胸・腹などを使用する者もあり、注目される。

② 動物の使用

結果を表12に示す。

表12 動物の使用

	N	有	無	群内の有意差	全群間の有意差
A	36	16 (44.4%)	20 (55.6%)		
B	42	18 (42.9%)	24 (57.1%)		
C	35	11 (31.4%)	24 (68.6%)		
D	28	9 (32.1%)	19 (67.9%)		
	141	38 (27.0%)	87 (61.7%)		

* $P < 0.05$ ** $P < 0.01$ *** $P < 0.001$

表の結果より、全群間の有意差が認められず ($\chi^2=2.093$, $df=3$, $P=0.551$)、よって、動物の使用については各群間の差があり、実施集団の特性が関係していると言えない。

また、各群内の動物の使用については、A群 ($\chi^2=0.506$, $df=1$, $P=0.477$) B群 ($\chi^2=0.774$, $df=1$, $P=0.379$) C群 ($\chi^2=1.186$, $df=1$, $P=0.276$) D群 ($\chi^2=1.872$, $df=1$, $P=0.711$) では有意差が認められなかった。さらに、A B C D群の合計では有意差が認められた ($\chi^2=5.510$, $df=1$, $P<0.05$)。

よって、A B C Dの各群では動物切片を使用する者が多いとも少ないとも言えない。また、A B C D群の合計でも同様である。

③ 植物の使用

結果を表13に示す。

表13 植物の使用

	N	有	無	群内の有意差	全群間の有意差
A	36	14 (38.9%)	22 (61.1%)		
B	42	16 (38.1%)	26 (62.0%)		
C	35	12 (34.3%)	23 (65.7%)		
D	28	8 (28.6%)	20 (71.4%)		
	141	50 (35.5%)	91 (64.5%)	*	

* P < 0.05 ** P < 0.01 *** P < 0.001

表の結果より、全群間の有意差が認められず ($\chi^2=0.914$, $df=3$, $P=0.822$)、よって、植物切片の使用については各群間の差がなく、実施集団の特性が関係していると言えない。

また、各群内の植物切片の使用については、A群 ($\chi^2=0.0557$, $df=1$, $P=0.813$) B群 ($\chi^2=0.048$, $df=1$, $P=0.827$) C群 ($\chi^2=0.7118$, $df=1$, $P=0.3999$) D群 ($\chi^2=2.74$, $df=1$, $P=0.098$) では有意差が認められなかった。さらに、A B C D群の合計でも有意差が認められなかった ($\chi^2=0.004$, $df=1$, $P=0.953$)。

よって、A B C Dの各群では植物切片を使用する者が多いとも少ないとも言えない。また、A B C D群の合計でも同様である。

④ 食べ物の使用

結果を表14に示す。

表14 食べ物の使用

	N	有	無	群内の有意差	全群間の有意差
A	36	20 (55.6%)	16 (44.4%)		*
B	42	22 (52.4%)	20 (47.6%)		
C	35	22 (62.9%)	13 (37.1%)		
D	28	7 (25.0%)	21 (75.0%)		
	141	71 (50.4%)	70 (49.6%)		

* P < 0.05 ** P < 0.01 *** P < 0.001

表の結果より、全群間の有意差が認められ ($\chi^2=9.847$, $df=3$, $P<0.05$)、よって、食べ物切片の使用については各群間の差があり、実施集団の特性が関係していると言える。

また、各群内の食べ物切片の有無については、A群 ($\chi^2=0.056$, $df=1$, $P=0.814$) B群 ($\chi^2=0.048$, $df=1$, $P=0.827$) C群 ($\chi^2=0.712$, $df=1$, $P=0.399$) D群 ($\chi^2=2.743$, $df=1$, $P=0.098$) で有意差が認められなかった。さらに、A B C D群の合計でも有意差が認められなかった ($\chi^2=0.004$, $df=1$, $P=0.953$ Yateの修正: $\chi^2=0.000$, $df=1$, $P=1.000$)。

よって、A B C Dの各群では食べ物を切片として使用する人数が多いとも少ないとも言えず、また、A B C D群の合計でも同様である。

⑤ 室内の使用

結果を表15に示す。

表15 室内の使用

	N	有	無	群内の有意差	全群間の有意差
A	36	9 (25.0%)	27 (75.0%)		
B	42	19 (45.2%)	12 (54.8%)		
C	35	12 (34.3%)	23 (65.7%)		
D	28	6 (21.4%)	22 (78.6%)		
	141	46 (32.6%)	95 (67.4%)	**	

* P < 0.05 ** P < 0.01 *** P < 0.001

表の結果より、全群間の有意差が認められず ($\chi^2=5.632856$, $df=3$, $P=0.1309$)、よって、室内切片の使用は各群間の差がなく、実施集団の特性が関係していると言えない。

また、各群内については、A群 ($\chi^2=4.80$, $df=1$, $P=0.029$) B群 ($\chi^2=0.048$, $df=1$, $P=0.827$) C群 ($\chi^2=1.186$, $df=1$, $P=0.276$) D群 ($\chi^2=3.811$, $df=1$, $P=0.051$) では有意差が認められなかった。さらに、A B C D群の合計では有意差が認められた ($\chi^2=8.077$, $df=1$, $P=0.005$)。

よって、A B C Dの各群では室内切片を使用する者の人数は多いとも少ないとも言えず、全体では少ないと言えよう。

⑥ 風景の使用

結果を表16に示す。

表16 風景の使用

	N	有	無	群内の有意差	全群間の有意差
A	36	11 (30.6%)	25 (69.4%)		
B	42	17 (40.5%)	23 (59.5%)		
C	35	12 (34.3%)	23 (65.7%)		
D	28	6 (21.4%)	22 (78.6%)		
	141	46 (32.6%)	95 (67.4%)	**	

* P < 0.05 ** P < 0.01 *** P < 0.001

結果より、全群間の有意差が認められず ($\chi^2=2.889$, $df=3$, $P=0.409$)、よって、風景切片の使用については各群間の差がなく、実施集団の特性が関係していると言えない。

また、各群内の有無については、A群 ($\chi^2=2.079$, $df=1$, $P<0.149$) B群 ($\chi^2=0.439$, $df=1$, $P=0.511$) C群 ($\chi^2=1.1864$, $df=1$, $P=0.276$) D群 ($\chi^2=3.811$, $df=1$, $P<0.051$) では有意差が認められなかった。さらに、A B C D群の合計では有意差が認められた ($\chi^2=7.295$, $df=1$, $P<0.01$)。

よって、A B C D各群で風景切片を使用した者の人数は多いとも少いとも言えず、A B C D群の全体は、使用したものが少ないと言えよう。

⑦ 乗り物の使用

結果を表17に示す。

表17 乗り物の使用

	N	有	無	群内の有意差	全群間の有意差
A	36	8 (22.2%)	28 (77.8%)	*	
B	42	11 (26.2%)	31 (73.8%)	*	
C	35	12 (34.3%)	23 (67.6%)		
D	28	9 (32.1)	19 (67.9%)		
	141	40 (28.4%)	101 (71.6%)	**	

* P < 0.05 ** P < 0.01 *** P < 0.001

表の結果より、全群間の有意差が認められず ($\chi^2=1.566$, $df=3$, $P=0.667$)、よって、乗り物切片の使用については各群間の差がみられず、実施集団の特性が関係していると言えない。

また、各群内の乗り物切片の使用については、A群 ($\chi^2=4.876$, $df=1$, $P<0.05$) B群 ($\chi^2=4.089$, $df=1$, $P=0.043$) で有意差が認められ、C群 ($\chi^2=1.186$, $df=1$, $P=0.276$) D群 ($\chi^2=1.181$, $df=1$, $P=0.277$) では有意差が認められなかった。さらに、A B C D群の合計では有意差が認められた ($\chi^2=12.950$, $df=1$, $P<0.001$)。

よって、A Bの各群では乗り物切片を使用する者の人数は少なく、D群では少ないとは言えない。また、A B C D群の合計では、明らかに変形をさせる者が少ないと言えよう。

⑧ 化粧品の使用

結果を表18に示す

表18 化粧品の使用

	N	有	無	群内の有意差	全群間の有意差
A	36	16 (44.4%)	20 (55.5%)		
B	42	18 (42.9%)	24 (37.1%)		
C	35	17 (48.6%)	18 (51.4%)		
D	28	11 (39.3%)	17 (60.7%)		
	141	62 (44.0%)	79 (56.0%)		

* P < 0.05 ** P < 0.01 *** P < 0.001

表の結果より、全群間の有意差が認められず ($\chi^2=0.575$, $df=3$, $P=0.902$)、よって化粧品の使用については各群間の差がなく、実施集団の特性が関係していると言えない。

また各群内は、A群 ($\chi^2=0.056$, $df=1$, $P=0.813$) B群 ($\chi^2=0.191$, $df=1$, $P=0.662$) C群 ($\chi^2=0.014$, $df=1$, $P=0.905$ 補正後 $\chi^2=0.00$, $df=1$, $P=1.00$) D群 ($\chi^2=0.289$,

df=1, P=0.591) で有意差が認められなかった。さらに, A B C D群の合計でも有意差が認められなかった ($\chi^2=59.059$, df=1, P<0.001)。

よって, A B C D各群では化粧品を切片として使用する者の人数は多いとも少ないとも言えず, 合計でも同様である。

⑨ 身に付けるもの

結果を表19に示す。

表19 身に付ける物

	N	有	無	群内の有意差	全群間の有意差
A	36	20 (55.6%)	20 (55.6%)		
B	42	23 (54.8%)	19 (45.2%)		
C	35	20 (57.1%)	15 (42.9%)		
D	28	19 (67.9%)	9 (32.1%)		
	141	82 (58.2%)	59 (41.8%)		

* P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001

表の結果より, 全群間の有意差が認められず ($\chi^2=7.749$, df=3, P=0.052), よって, 身に付けるものを切片として使用するものについては各群間の差がなく, 実施集団の特性が関係していると言えない。

また, 各群内については, A群 ($\chi^2=0.056$, df=1, P=0.813) B群 ($\chi^2=0.519$, df=1, P=0.472) C群 ($\chi^2=0.129$, df=1, P=0.719) D群 ($\chi^2=1.1805$, df=1, P=0.277) では有意差が認められなかった。さらに, 合計でも有意差が認められなかった ($\chi^2=1.574$, df=1, P=0.210)。

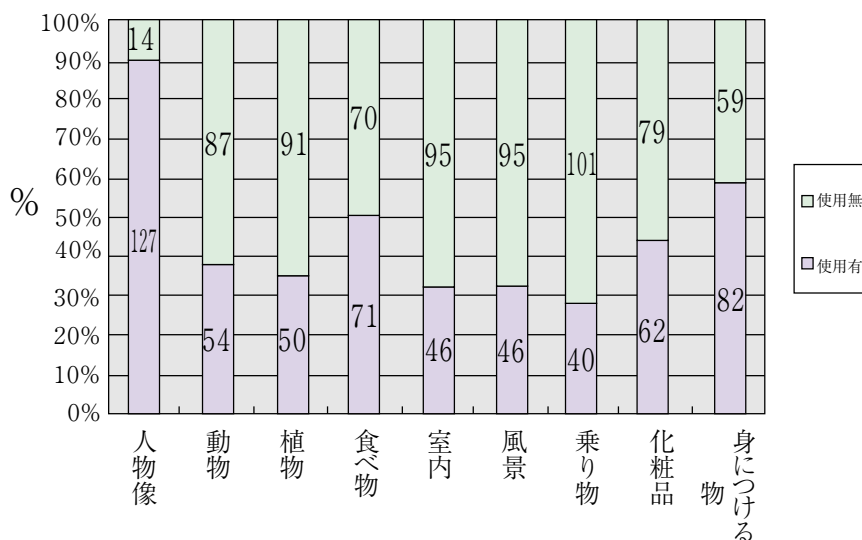


図2 切片の種類による使用頻度の比較

よって、A B C D各群で身に付けるものを切片として使用する人数は多いとも少ないともいえず、合計でも同様である。

2) 切片の種類比較

切片種類ごとの使用の有無の差については上記に示した。その結果、切片の種類により使用頻度がかかなりばらつきがあることがわかる。この点をさらに分析し、切片の種類ごとの使用頻度を比較すると図2のようになった。その有意差についての結果を表20に示す。

表20 切片の種類別の比較

切片の種類	使用有	使用無	切片内の有意差	全切片の有意差
人物像	127	14	***	***
動物	54	87		
植物	50	91		
食べ物	71	70	*	
室内	46	95	**	
風景	46	95	**	
乗り物	40	101	**	
化粧品	62	79	**	
身に付ける物	82	59		

表21 各切片の使用頻度における有意差検定

	人物像	動物	植物	食べ物	室内	風景	乗り物	化粧品	身に付ける物
人物像				***	***	***	***	***	***
動物	***			*					**
植物	***								**
食べ物	***				**	**	**		
室内	***			**					***
風景	***			**					***
乗り物	***			**				**	***
化粧品	***						**		*
身に付ける物	***	**	**		***	***	**	*	

表20の結果によると、全群間の有意差が認められ ($\chi^2=197.728$, $df=3$, $P<0.001$)、よって、切片の種類による使用の有無の差は大きいと言える。

また、表20・21からは、他の種類に比べて多く使われている順に、人物像 (8/8) 身に付ける物 (7/8)・食べ物 (4/8)・乗り物 (4/8)・室内 (3/8)・風景 (3/8)・化粧品 (3/8)・植動 (2/8)・動物 (2/8) になっている。

V 考察

1. 形式分析結果の考察

1-① 台紙からのみ出しの有無

結果から、実施集団の特性に関わらず、台紙から切片をはみ出させるものが少ないことがわかった。一定の画用紙を与えられるとそれを枠としてとらえその中で作品を完結させる姿は、準拠集団の枠組みや社会の枠組みに対し、特に反発したり批判的行動にでることもなく、そのなかで「適当」に生きていく若者の姿を感じさせるとも言える。

今回は分析に使用しなかったが、作品完成後、枠からはみ出した作品についてどう思うかの意見を求めたところ「(枠からはみだすことを) 思いつきもしなかった」「枠の中に収めるものだと思っていた」と言う声が聞かれた。

1-② 台紙の使用法(変形・加工など)

結果から、D群のみで有意差がなく、実施集団の差がある。

D群の制作課程を観察していると、クラスのリーダー的存在の学生が変形・加工を先駆けて行い、それをみて変形・加工の方法を採用したとも思われる面があった。D群以外では、①と同じように作品完成後の意見には「思いつかなかった」という意見が多く、D群においても「(加工しても) いいのかどうか迷い勇気がなかった」「おもしろいなあと考えて(変形加工の作品を) みたが、自分もしたいとは思わなかった」、また実際に変形した学生は「△さんがしているのをみて、四角のままではつまらないと思った」などと述べている。

自分の思いつきや発想によって行動するというよりも、みんながしていることをする、みんなと同じように生きるという、現代若者の態度の一面を如実に表すように思われた。

1-③ 切りぬきの数

切片数は、実施集団の差がなく、むしろ個人差の大きさが明確となった。ひとつの切片をはって満足する学生から、178片を用意した学生までの差の大きさがあらかずものは何であろうか。切片数の多い方が自己表現力に優れているとは言えず、また、少ないものが優れているとも言えない。この結果からは自己表現の方法にはばらつきがあるとしかたない。

平均的な切片数については、中央値でみても30切片前後である。先行研究との比較すると、年齢の近い高校生・20歳台いずれと比べても本研究では切片数がかなり多いことがわかった。これについては以下の4つの原因が考察できる。

- 集団凝集力の問題：短大に入学して2ヶ月であり、授業や実習を通じて交流しているにしても集団凝集力はまだまだ弱い段階である。そこでくじびきによって座席を指定され、必ずしも打ち解けて話ができるとは思えない。こうしたグループ構成において、はやく作品を完成してしまうと時間が余り、気まずいと考えてつたくさんの切片を貼ってしまう。
- 指示がないことの不安：作成時間が決められておらず「好きなように作る」ということは一見楽しいが指示がないことで不安も感じてしまうようである。はやく完成してしまうと手持ち無沙汰になる。それよりは何かをしていた方がいいと、切片をたくさん用意し貼ってしまうことが考えられた。実際、作業中「終わったら何をしていたらいいですか」という質問が非常に多かった。一貫して「席から離れないで好きなことをしていたら」と答えたが、自由

に話をしている学生は少なく、困った顔を見せた学生が多かった。現代若者が「指示待ち」だとよく耳にするが、その姿の現れであろう。

- 自己表現の方法：「自分を表す」という課題に対し、自分を簡潔に表現することができないとも考えられた。たくさんの切片をはり、たくさんの自分をちりばめる自己表現法を採択する。複数の先行研究でテーマ性の有無、テーマそのものの分析を実施しているにもかかわらず本研究でとりあげなかったのは、予備調査の段階でもはっきりとしたテーマがあると判断できる作品が極端に少なかったためであった。今回の分析に使用しなかった学生の感想には、「とにかく自分の好きなものを貼っていった」というものが多数あった。自己認知を言語化してとらえるより、好き嫌いの感性レベルで作品を作る様子については、さらに他方向からの分析が必要であろう。
- 作品の美的完成度：100以上の切片が貼られた作品は、「もの」の切抜きではなく作品を飾る目的で紙片を細かくちぎっているものが多い。作品のデザイン性を高め「飾る」という行為である。作品を飾る目的で授業に先立って「これは美術の授業ではないのできれいにつくったりする必要はありません」と説明しているので、コラージュを美術的課題ととらえているとも考えにくい。これが自分を飾ることにつながるのかどうか明確ではないが、自分を説明するポスターを「飾る」行為があることは意味深い。

1-④ 重ね貼りの有無

全群の80%が切片を重ねて貼っているという結果である。これは単独で考察することは難しく、重ね貼りは、切片数と密接な関係があり切片数が多いのでたくさん貼ろうとすると重ねて貼ることにもつながるとも言える。また、次の余白とも関連がありあわせて考察する。

1-⑤ 余白の有無

結果から、実施集団の特性の関連がみられる。C群は特に切片数も多いとは言えず多群と比較して特徴が見当たらないが、C群の学生の感想によると「同じグループの人が余白を埋めていたので、余白がない方がいいと思った」との主旨をかいた学生が2～3おり、これが反映されていると思える。作品を見ると、C群に限らないが、台紙いっぱい新聞紙などを下地として敷き詰めてから切片を貼っていくという手法をとる学生がいる。これらを見て影響を受けたとも考えられよう。

むしろ余白の有無を問うより、こうした余白を作らない作品の個別の分析（制作過程や作品のテーマ性、事例としての課題性など）や、余白の分量や位置の問題を検討していくことの方が意義があるのではないかとも思われた。今後の課題であろう。

1-⑥ 切片のかたち / 1-⑦ 切片の切り方 / 1-⑧ 文字の有無 / 1-⑩ 貼り紙の変形

全体では貼り紙を変形しないものが圧倒的に多いが、D群のみで多いとは言いきれなかった。②でも触れたが、制作過程の観察によると、台紙の変形・加工と同じように、誰かがすると「(貼り紙の変形を)してもいいのか」「おもしろい」とおもって自分もする、という学生が何人かいたためであると思われる。これも、誰かがするまでしない、自分の思いつきや発想で行動するのではなくみんなと同じように行動する態度の表れであるともいえよう。

2. 内容分析結果からの考察

2-①人物像の使用

人物像は実施集団の特性に関わらず、全体でその9割が使用する。他の項目に比べても突出して使用度が高い。自分を表現するという課題に対し、直接的に人物を使用するというこの意味はさまざまである。自分に近いもの、理想の自分、表情など、自分の姿を投影している。また、自分ではなく、自己を取り巻く周囲の人物の表現であるとも言える。友人、教師、知人、家族の姿を置くことで自己の人的環境をあらわすという意味も考えられる。

また、この人物像の使用についてだが、日本人のみよりも外国人を使用することが多いことが興味深い。独立性の検定上はA群のみが外国人使用が多いといえるのではあるが、どの群でも過半数が外国人切片を使用している。上に述べたように自分の表現、あるいは自己の周囲の人物の表現に外国人をつかうことの意味は何か。持参した雑誌は圧倒的にファッション紙が多く、外国人も出るが登場する頻度が高いため、目に付いたものを切片としてつけたという要因も考えられる。しかし、「目に付く」ことの意味を考えれば、理想の私、こうなりたい、こうみられたいという願望の表れではないか。また、作品のデザイン性として、きれいにまとめたいためという理由もあろう。いずれにしても、外国人へのあこがれが女子短大生にあるということも考察できる。今回は採択しなかったが独立変数として、大学における専攻のちがいを分析し、再検討する余地がある。

さらに、身体の一部を使用するかどうかについて、結果から多いとは言えなかった。身体の一部を使用した作品をみていくと、目のみ多数貼りつけた、あるいは作品の中心におおきな口を配置したなど特徴的な作品である。これらから、効果的に何かを訴えたいとき、身体の一部を使用するといえそうである。特に目には、他人の視線を感じる自分、あるいは自分の視線をあらわすとも言え、また、口には何かを言いたい、食べたい、他者から何かを言われる自分、他者の評価などを気にする自分が考えられる。これらも、作品の個別のテーマ性や事例としての検討を加えていくことの重要性も感じた。

2-②③⑤⑥ 動物・植物・室内・風景の使用

いずれも実施集団の特性もなく、全体としては使用は少ないと言える。作品を見ても、動物・植物・室内がテーマの中心を占めるということもなく、作品の補助的な使い方個人に興味・関心の範囲であると言えよう。

風景に関しても使用は少ない。しかし、作品を見ると「旅」「あるいは旅行がしたい自分」がテーマとなっていることがある。この場合は多く旅行パンフレットが材料として採択されている。女子短大生にとって、旅・旅行への関心が高いことが伺える。

2-④ 食べ物の使用

実施集団による特性については、ABC群では使用が半数を超えるが、D群のみが使用が少ない方が多いための有意差である。

食べ物切片の使用については、作品を見ていくとダイエットや食をテーマにするものが目に付く。女子短大生の関心のひとつにダイエット、あるいはおいしいものを食べることがあられることがあらわれている。

2-⑥ 乗り物の使用

全体では乗り物を使用するものが少なく、A B群では明らかに差があり、各郡とも使用しないものが60%を超えている。これは、乗り物への関心の薄さの要因があるだろう。対象となった本学の学生は自家用車通学が認められておらず、公共の交通機関をつかって通学する学生がほとんどであり、原動機つき自転車、自転車以外は自家用車はそう身近ではない。また、短大1年生の5月であれば普通自動車免許の取得率も低く、自動車についてはそう関心がない。その他の乗り物も作品で使われることは少ない。風景切片を多く利用する旅などをテーマとする作品には飛行機や電車が使われており、原動機つき自転車の使用もあることから、乗り物の種類の分析が必要であったろう。今後の課題である。

また、男子学生を対象とした場合の分析と比較することも興味深い。

2-⑧ 化粧品の使用

予備調査の段階で化粧品使用が非常に多かったためこの項目を採択したが、各群・全体とも使用が多いとは言いきれなかった。しかし、有意差はないがいずれも半数近くが化粧品を配置している。作品を見ると、化粧品をテーマとして使用するよりも、作品の補助的な役割としては位置されている。材料となる雑誌類がファッション誌が多く、化粧品の特集や広告が多いことも一因であろうが、女子短大生の化粧品への興味の高さははっきりと現れているといえよう。

2-⑨ 身につけるものの使用

化粧品同様、予備調査で使用が多かったため採択した項目である。有意差はないが、4割前後の使用がみられ、また2)切片の種類と比較でも、他に比べて人物像に次いで使用が多かった項目であった。作品を見ると、靴ばかりを20足並べる、バック類を周囲に一巡させる、さまざまな洋服を全体に配置するなど、同種のを多数使う方法や、人物像に着せ替えさせるなど自分の好みに合った切片にかえるための方法、補助的に配置する方法などさまざまであった。女子短大生にとって関心の高いグッズであるとともに、非常に身近なものであるといえよう。

3. 形式分析・内容分析考察からみた女子短大生の自己表現力

形式分析からは、周りと同じことをすることの安心感、枠からは特にはみ出ることのない生き方、指示を待つ姿勢など「最近の学生気質」として話題になる事柄が現れていたように思われる。

内容分析からは、コラージュ作品において自己を表現するとき、人物像・身につけるものを多く使用し、そのほかのものは個人の興味の範囲で使用しているようである。人物像はダイレクトに自分や他者を表現し、その補助手段として興味・関心の高いものを配置している。

実施集団の特性は、作品に影響を与える点と与えない点がある。台紙の加工や変形、余白、貼り紙の変形などは、集団の構成員の影響が大きい。クラスの雰囲気やリーダーの存在は作品そのものを大きく変えるというわけではなく、形式の部分に作用する。また、内容分析では実施集団の特性と言えるものはなく（食べ物については除外）、コラージュに採用する切片の内容は個人の興味・関心により決定されている。コラージュを個人療法として取り入れる場合、セラピストとクライアントが同時に作品を作る同時制作法が用いられることがある。

箱庭療法でもよく使用される。本研究においても、グループあるいはクラス全員が同じコラージュをすることによって、安心感をもたせたり、影響を与え合ったりすることが言えるであろう。また、作品を作りながら自分の興味関心について、あるいは作品とはまったく関係のない日常のことについて話をするチャンスをもつことが、集団凝集力を高めることにつながることもある。切片数の多さから、今現在は集団凝集力が多いとは言えないが、高める機会となったとはいえる。これがピア・カウンセリングの効果を持つといえるかどうかは、今後学生のふりかえりあるいは感想の分析や、作品の制作過程の観察分析を経ないと言えないことであるが、本研究においては、作品の形式に影響を与え合うことが実証された。

4. 問題点と今後の課題

研究の分析対象とはしなかったが、いくつか印象的な点があった。第一に制作過程において、貼り付けまでの時間がかかる点である。雑誌をめくり、気に入ったものをはるまでに非常に時間がかかるように感じた。第二に、心理的退行に関することである。のりをつかうことが久しぶり、何かを切りぬくことが懐かしい、という声が多く聞かれた。第三に、制作態度にいくつかのタイプがあることである。

- ・ 作る前からイメージを起こし、それにそって作っていく人
- ・ 興味のある材料を見つけるとまず切りぬき貼っていったり作り上げる人
- ・ 興味ある材料を見つけるとまず切りぬき、それらを組み合わせてテーマを作り上げる人
- ・ 雑誌類をひととおり見て、イメージを作り上げてからはっていく人

また、クラスによってグループ間の移動の激しいクラスと、グループをまったく動かないクラスがあった。第四に、どのクラスでも聞かれたことだが、教員がグループ間を動いていると「これで何がわかるの?」と性格の分析を期待する声が多かった。心理テストや他のプログラムでもこの解釈してほしい、という態度はかなり強くあらわれる。手軽な心理テストもどきやメディアの扱いの影響もあるが、自己への興味関心の強さとも受け取れる。研究の目的として、集団コラージュ制作が自己認知・自己表現の方法として採択できるのであれば、さらに制作過程の観察分析、学生本人のふりかえり、感想の分析を必要とするであろう。これは今後の課題である。

また、集団コラージュ制作が正規の授業であることの問題点がある。コラージュ制作に対し、表立った拒否ができない点である。授業である限り無理にでも作らなければならない、拒否や躊躇は無視されないまでも授業で教員の指示に逆らえないという意識があれば「強要」にもなりかねない。個人療法でコラージュをつかう場合、この点はとても重視される。中井(1993)は、コラージュ療法の安全性と回避性について述べている。しかし、学生集団は必ずしもなんらかの病理や心理的困難をもつわけではない。こころの健康さを大前提とした授業である。もちろん中には何らかのリスクを持つものもある。それらが実施前から明らかな場合、あるいは制作過程で発見できた場合にはファシリテーターの緻密なフォローが必要となる。人間関係科目におけるコラージュの適用と言えども、個人療法におけるコラージュの知識と実践をもつ教員が担当することが望ましいと実感する。さらに、ここで、体験学習としてコラージュを導入した場合、病理性のある学生の発見やスクリーニングを目的としては行っただけではないということ強調しておきたい。学習の結果として個人的な心理的困難についての相談へつながったこと

はあるし、十分想定できるが、目的として設定することには異を唱えたい。

分析方法の問題点や今後の課題は多いが、本研究で対象とした141枚のコラージュ作品は非常にさまざまでテーマも興味深く、さまざまなことを示唆する材料であった。同じ作品はひとつとしてなく、ひとりひとりの顔が見えるかのような作品である。コラージュ作品をはじめとして2年間の人間関係科目で多くの体験学習を取り入れているが、そのプログラムの従来の反省、今後の充実のために本研究の成果を役立てていきたい。

【引用・参考文献】

- 1 星野欣生（1992）「体験から学ぶということ－体験学習の循環過程」津村俊充・山口真人編『人間関係トレーニング－私を育てる教育への人間学的アプローチ』ナカニシヤ出版
- 2 田上不二夫・岸田幸弘 他（2000）「対人関係ゲーム・プログラム（SIG）による学級作り－「群れづくり」を中核とする人間関係づくりのアプローチ」日本カウンセリング学会第33回大会 発表論文集 日本カウンセリング学会
- 3 國分康孝編『構成的グループ・エンカウンター』誠信書房
- 4 森谷寛之（1988）「コラージュ技法の導入方法」『コラージュ療法入門』創元社
- 5 杉浦京子（1994）「コラージュ療法とは」『コラージュ療法 基礎的研究と実際』川島書店
- 6 Remocker & Storchi 篠田峯子（訳）（1983）『身ぶりで語ろう 適応時間50の治療ゲーム集』協同医書出版社
- 7 津村俊充・星野欣生（1996）『Creative Human Relation II 個人の気づき 私とあなたに気づき、私を育てるために』株式会社プレスタイム 行動科学実践研究会
- 8 杉浦京子（1994）「臨床場面でのコラージュ技法の歴史」『コラージュ療法 基礎的研究と実際』川島書店
- 9 岡田安伸（1984）『箱庭療法の基礎』誠信書房
- 10 中井久夫（1993）「登校拒否児とその母親のケース－コメント／コラージュ私見」『コラージュ療法入門』創元社